

平成26年度岐阜総合学園高等学校自己評価

(○ : 成果 ▲ : 課題 ※ : 来年度に向けての改善策)

1 学校経営

A (B) C D

○部活動において、硬式野球部が秋の県大会で初優勝し、東海大会に出場した。また、県の21世紀
枠校として推薦いただいた。ホッケー部男子の国体準優勝、マルチメディア部の文部科学大臣賞受
賞等、多くの部で好成績を残した。また、資格試験、検定試験、コンテスト等に積極的に取り組み、
その成果を進路実現に生かすことができた。

○まだ、すべての教員が新しいスタイルの授業を意識して、授業改善に取り組むことに至っていない。

○登下校の交通事故件数の大幅な減少は達成できなかったが、これからも機会をとらえて安全意識の
向上に努めたい。

▲部活動と勉強の両立、特に家庭学習の習慣化が課題である。

※教員の授業力の向上と、新しい授業方法の研究を進めるためにも、授業力向上委員会を中心に「授
業内容を授業時間内で定着」できるよう研究を進める。

※すべての分掌が安全で安心できる学校づくりに取り組む。

2 教務部

A (B) C D

○系列の特色を生かした指導の成果が資格・検定取得状況等に表れている。

○今年度より、授業力向上委員会を開き授業の向上に努めた。特に今年度は、各授業において「生
徒の自主的な活動の場の設定」「授業のねらいの具体化・明確化」の2点に重点をおき研究を
実施した。

○校外での出前授業を企画しHPに掲載した。依頼のあった中学校で授業を実施し科目選択や系
列学習の魅力を伝えることができた。

▲生徒の学習状況は、考査前はよく取り組んでいるが、それ以外の期間は不十分である。今後は
継続的に取り組めるよう授業改善・評価方法を含めて検討する必要がある。

▲各考査期間に家庭学習時間の調査・集計を行った。学習時間確保は見られたもののしっかりと
した基礎学力が定着するまでには至っていない。

※数年後の入試制度・入社制度の改革を見据えて、教育課程、学習課題の内容と与え方、指導法
をおよび評価法を研究し生徒の学力向上に努める。

※授業力向上委員会、教科会等で到達目標を明確にして、各教科での「基礎学力定着」と「生徒
の自主的な活動（言語活動を含む）」を意識した授業研究を推進する。

2 進路指導部

(A) B C D

- 「行ける学校から行きたい学校へ」という目標のもと計画的にガイダンスや進学指導を行った。結果、指定校推薦は全体の35%(昨年44%)まで減少した。難関校に対しても公募推薦・AO入試で70%の合格率を残し、系列と連携した進学サポートも十分に機能したと評価できる。3年次生は、3年前キャリア教育の見直し後の最初の卒業生であり、進路選択と決定については取り組みの成果を評価する年であったが、目標に近い進路指導ができたと考える。
- 就職は求人も多く獲得できたこともあり、内定率は、ほぼ100%となった。公務員志望は5名全員が合格した。
- ▲3年次の中には、自主性・主体性・コミュニケーション力が不足している生徒が多々見られ、推薦入試では不合格になる生徒が見られた。キャリア発達が遅れている生徒に対してのサポートをどうするかが課題。
- ▲キャリア発達は見られるが、基礎学力は身につけていない生徒が多々見られる。
- ▲キャリア教育の評価の観点に対する研究が不足している。
- ※キャリア教育の基礎的汎用的能力に対する評価方法、数値化について研究する必要がある。特に、基礎的汎用的能力を培う教科指導においては、評定に含めて評価するための具体的な基準を研究していかなければ、授業でのキャリア教育推進は進まないと考える。
- ※大学入試・就職試験に対する国の改革に対応して、基礎学力を伸ばすための改革について検討に入りたい。カリキュラムの刷新、外部模試の全員受験、補習の見直しなど。各分掌・系列と連携をはかりながら具体的な提案をしていきたいと考える。

3 生徒指導部

A (B) C D

- 本校生徒の頭髪は、登校点検や普段の指導によって保たれている(登校点検は必要)。2ヶ月に1回の全校一斉登校点検としたことで11・12月が無く、その結果、男子の髪の長さや髪形が非常に気になった。来年度は、従来に戻し12月上旬にも実施するようにしたい。また、普段の生活の中で気になったら指導することを徹底したい。
- 遅刻数が大幅に減少した。この2年間減少傾向の中、今年度は23クラスとなり、総合学園になって生徒数が最高となり不安であったが、634名(1/20現在)と激減しており1000名を切るという目標は実現しそうである。
- ▲2年連続30件を超えた交通事故。今年度は減少するよう啓発活動の強化を図った。しかし、夏休み前までは減少ペースであったが、10月6件・11月5件発生し12月までに25件。1月には3件発生し計28件となり、昨年度とほぼ同等の結果となった。避けられる事故も多々あった。交通マナー・ルールを守り、危険を予測して事故防止に努めるよう、集会・HR・部活動等で常に生徒に啓発したい。

4 特別活動部

A (B) C D

○生徒一人一人が、学校行事や、委員会活動、部活動などの諸活動において、意義を見だし、積極的に取り組む姿勢が、学校の活力となることができた。

○部活動を中心に、各種委員会、系列などにおいて、生徒が、主体的に活動し、その結果、数々のコンテスト、コンクール、などで結果を出した。

▲今年度1年次生の部活動加入状況に一部定着がみられなかった。特別活動部、部顧問、HR担任との連絡、連携を登録カードを使い保護者懇談などにフィードバックしていきたい。又、部活動に対して目標を見いだせない生徒が出てきている。

▲諸活動において、さらに学校への規範意識と、社会の一員としてのモラルやマナーを守る姿勢を培うことが課題である。

※それぞれの活動における学校への規範意識の向上と、奉仕する心の育成、活動のより明確な目的意識の設定と、社会の一員としてのモラルやマナーを守る姿勢を培う。

※部活動への取り組みについては、新入生に対してのオリエンテーションの在り方、本登録後の活動状況など、特別活動部、部顧問、HR担任とのより密接な連絡、連携を目指し、生徒一人一人に合った指導方法、援助について研究する。三年間を通して活動できる部活動の体制を検討する。

※生徒会活動により積極的に参加できるように生徒会役員選挙から生徒一人ひとりの個性を尊重しつつ、活動を通して協調性、規範意識を高める姿勢を培う。

※LHR活動の充実化を目指し指導法の研究を行う。

※保護者、地域の方々に、より生徒の活動を理解して頂けるよう、より良い広報活動の研究。

5 保健厚生部

(A) B C D

○集団行動では、担当職員が早い時間から指導を始め、生徒も素早い行動が出来た。新体力テストでは、今年度も良い成績であった。

○保健室の利用において、怠学傾向の生徒利用もなく適切であった。

○AED講習会では、心停止事故が発生した時、至急対応できるように、職員とスポーツ科学系列の生徒が受講し修了証を受けた。

▲ゴミの出し方（分別）、飲食ゴミの放置等、一部マナーの悪い点が見受けられた。

※今年度は概ね良い活動・実施状況であったので、来年度も今年度同様、活動・実施していきたい。

※ゴミの分別、放置、マナーについて注意していきたい。

6 図書部

Ⓐ B C D

- 昨年度と比較し、更に充実した朝読書が実施できた。
- 図書館で読書に親しむ生徒が多くなるとともに、貸出冊数も増加した。
- 読書指導の一環である「読み語りの会」の参加者が増加し、盛況であった。
- 第 60 回岐阜県青少年読書感想文コンクール高等学校部門に応募した結果、1 編が佳作に入賞した。
- 第 46 回岐阜県高等学校図書館だよりコンクールで優秀賞を受賞した。
- ▲読書に興味・関心のない生徒や読む習慣が身につけていない生徒への対応。
- ※読書に興味・関心のない生徒に対しては、折に触れて職員全体で読書の意義を説くとともに、人間関係を大切にしながら継続的に指導していく。
- ※4年目を迎えた通年朝読書はしだいに定着してきたが、さらに充実発展させるための工夫を重ね、本校が誇れる情操教育の一つとしていきたい。

7 渉外部

Ⓐ B C D

- 会員との連携をより進めたことで P T A 研修、学園祭・耐寒競歩大会での P T A バザーの参加者が増えた。
- ▲ P T A 総会により多くの人に参加できるように進める。

8 1年次

Ⓐ B C D

- 「産業社会と人間」における様々な講話や講演、ライフプランの作成、インターンシップ等において、自己の将来について真剣に考えることができた。
- 生徒同士の好ましい人間関係、教師との信頼関係の確立、明るく活気あるクラスの雰囲気づくりを目指し、生徒自らの力を発揮させることができた。
- ▲学習に対する積極的な姿勢の養成、とりわけ、家庭学習の習慣を定着させる指導が今後の課題である。
- ※自己の進路目標やライフプランを見すえ、進路実現や生涯学習への基礎となる学力を身に付けさせるため、家庭における学習習慣の定着を図る具体的な方策を打ち出していく必要がある。
- ※生命の尊さや社会規範の持つ意味を理解させるため、あらゆる機会を通じて啓発活動を行っていく必要がある。

9 2年次

A B C D

- 自ら選択した系列学習に積極的に取り組み、資格試験に挑戦した。また外部模試にも多く参加し、進路希望実現へ大きく前進した。
- 多様な悩みを抱えている生徒へは、担任・年次会・教育相談係・部顧問その他との連携により、問題解決に向けて個々に合った指導助言を行なうことができた。
- 1年次から継続している、遅刻や交通事故の件数削減ができた。
- ▲生徒への各種指導において、各分掌の事前の連絡がやや不十分で、各種調査やアンケートの意義を徹底した上で取り組ませることができなかった。
- ▲諸行事への積極的・自主的な参加態度は、一部には見られたが、個々に意識を徹底する指導ができたとは言えない。
- ※受動的な学校生活から脱して、能動的な学校生活を送るために、部活動や諸行事に積極的に取り組ませる。特に、最終学年として、進路実現・諸行事への取り組み・仕上げの一年間の取り組みなど、個別の目標と計画をしっかりと立てさせ、また個人でスケジュール管理や計画の進捗状況の把握ができるよう適切な助言をしていく必要がある。
- ※悩みを抱える生徒の把握と彼らへの助言を積極的に行って、学校生活が円滑に送れるように促していくことが重要である。

10 3年次

A B C D

- 進学者では、安易に指定校推薦を取らず、進路希望に沿ってAO入試や一般推薦等にチャレンジする者の割合が例年より多かった。
- 進路指導部・担任・系列の先生方の適切な連携で大半の生徒は希望の進路を実現できた。
- 何度も注意を喚起したためか、遅刻や交通事故を減らすことができた。
- ▲多様な悩みを抱えている生徒へは、担任、年次会、教育相談係、部顧問その他との連携により問題解決に向けて個々に合った指導助言を行なうことができた。しかし、最後まで解決の難しい問題もあった。
- ▲諸行事への積極的・自主的参加は、全体としては成果が見られるが、個人が意識的に行えるような指導ができたとは言いがたい。
 - ・進学は、自ら積極的に進学先や入試の方法を研究し決定する生徒が増えた一方、受動的な姿勢で本気で動くのが遅い生徒もいた。進路決定に危機感を持たない生徒がいることを前提に進路指導をしてゆかねばならない。
- ※経済的な理由で当初の進路希望をあきらめる生徒がいた。なかなか難しいのだが、保護者懇談などで経済的に苦しい生徒を把握し、一緒に手だてを。
- ※2月以降も受験をする生徒のうち、希望者には特編のように勉強できる場所を提供したい。